

Title	東京歯科大学の戦略
Author(s)	一戸, 達也
Journal	歯科学報, 123(1): 1i-1i
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/6185">http://hdl.handle.net/10130/6185</a>
Right	
Description	



## 東京歯科大学の戦略

一 戸 達 也

昨今、さまざまな場面で「PDCA サイクル」という語を聞く。Plan-Do-Check-Action のサイクルは、第一義的には autonomy によって自身で課題を発見して改善につなげることであるが、それに留まらず、ステークホルダー、本学であれば、まず学生、次に患者さん、そしてすべての教職員、さらには第三者からの評価をもとに、抽出された課題を改善するという行動をスパイラルのように反復継続することを意味する。

わが国の高等教育改革の実現すべき方向性として、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」において「学修者本位の教育の実現」が謳われており、「何を学び、身につけることができたのか」というアウトカム基盤型教育への転換が求められている。本学においても「卒業認定・学位授与方針」の具体像を、学修のアウトカムとしてのコンピテンシーとしてまとめている。従来のインプット（大学の持つ資源）・プロセス（教育課程）重視の教育をアウトプット（学修成果、例えば歯科医師国家試験合格）・アウトカム（どれだけ高いコンピテンシーレベルの歯科医師を養成できたか）重視の教育に転換していくためには、さまざまなレベルでの PDCA サイクルの実質化に基づく内部質保証の充実が必須である。

本学は、学生自身の努力とすべての教職員の手厚いサポート体制によって、歯科医師国家試験の高い合格率を維持し、歯科界をリードする優秀な人材を輩出してきた。これは本学が以前から推進してきたアウトカム基盤型教育のひとつの成果であり、教育において PDCA サイクルが良好に機能している証でもある。その他にも、本学は教育・研究・診療・社会貢献など、多くの課題について PDCA サイクルを機能させ、歯科医学教育機関としての内部質保証の充実に努めてきた。

この度、東京歯科大学学長を拝命したことから、本学の絶え間ない向上を目指して、本学のこの PDCA サイクルをより「見える化」することによって、すべての教職員が一丸となって内部質保証の充実に貢献できるように、そしてその貢献が実感できるように、「各領域の戦略」をまとめることとした。この戦略は、2022年7月開催の自己点検・評価委員会と9月の学務協議会で協議した後、教授会で承認されたものである。

戦略の内容として、教育、研究、国際化、医療、社会貢献、そして教学マネジメントとガバナンスという6つの大項目の中に、全体で25の具体的項目としての行動目標を設定した。詳細については教授会資料を見ていただきたいが、例えば教育については、①3つのポリシーとコンピテンシーの実質化、②入試制度の見直し、③高大接続教育の充実、④国際コミュニケーション力の育成、⑤歯科界のリーダーとなるためのキャリアパスの構築、⑥大学院教育の高度化と国際化に基づく研究人材育成、⑦学生の生活支援の充実、⑧生涯教育の8項目をあげた。

このような行動目標を明文化することによって、教職員が、自身が関与している業務における課題を発見して改善し、より高いレベルの成果を産み出すために何をすれば良いのかが分かりやすくなる。それと同時に、関連するスタッフと課題を共有し、議論することによって、課題解決のためのより良い策を発見でき、そしてその策が実施された時の改善への貢献の実感も増すものと考えている。

実際、2022年12月現在での実績をまとめたところ、すでに多くの成果が得られた行動目標がある一方、ようやくスタートラインに立っただけの行動目標もある。しかし、これはこれで良い。教職員の皆さんが情報を共有し、一緒になって課題解決と改善のための知恵を出し合う土壤ができることが重要である。それと同時に、今回まとめた戦略自体が常に見直されなければならない、ここでもまた PDCA サイクルが機能することが重要である。

本学のすべての教職員は、日常のさまざまな業務の中での改善すべき課題を発見し、それを同僚や上司と共有し、課題解決のために何をすれば良いのか、ぜひ議論に基づく提案をしていただきたい。本学の発展に結びつくものであれば大歓迎である。

(東京歯科大学 学長)